寺方の大日さん

寺方町一区

寺方町一区自治会が運営している大日寺は、比叡山延暦寺の天台宗派に属し、『寺方の大日さん』として親しまれています。

大日寺は、奈良時代の天平 8 年（736 年）に行基上人が創建した寺院で、もと鈴鹿郡国府にあったと言われています。鎌倉時代の建保 2 年（1214 年）に三代将軍源実朝が京都に上るため、尾張国知多郡大野浦から伊勢湾を渡り、伊勢国三重郡塩浜浦に上陸した際、大日寺の宗徒や村人約 300 人が将軍の甥僧禅師公卿に依頼され、将軍を討とうとした。しかし、将軍は、小山朝政などの武将に守られて、これを退けるとともに、大いに怒り、寺を焼き払らおうとしたので、宗徒や村びとは大日如来坐像をこの寺方の地に運び、安置したと言われている。なお、これについては、将軍は大日如来の尊厳さに心うたれ、堂塔を建立し寄進したとの説もある。

その後、織田信長の家臣滝川一益が北勢 5 郡を平定した時にも、寺は兵火にかかって焼失しており、現在の本堂は江戸時代の文化 6 年（1805 年）に再建されたものである。

本尊は“金剛界大日如来座像”で、坐像は檜材による寄木造りで丈六坐像と一般的に云われ、蓮台座から光背までが約 5.3m、像高 3.14m、膝張り約 2.2m、蓮台の高さ約 90 ㎝の巨大な座像で大日如来像としては、屈指の大きさである。当座像は、頭に美しい六角の宝冠を頂き、白毫には水晶を嵌入し、胸には瓔珞、腕には肘釧、腕釧を着け、両手は智拳印を胸のあたりで結んでいる。作者不明（郷土史「かんざき」には、天平 8 年行基菩薩の作とあるが詳細不明）で、寺の伝記では室町時代の作とあるが、装飾品の彫りや形、視線を下方に向けた両眼、張りのある面相の輪郭、両手の安定した構え、しっかりした体躯の肉取り等から平安時代後期の作と認定されており、中央（都）の仏師により造像されたものと推測されている。昭和 31 年に四日市市指定有形文化財に指定されている。

大日寺の年中行事として、元旦には新年恭敬法要、2 月の節分護摩法要、釈迦入滅の 3 月 15 日には長さ約 4 m、幅約 2 mの“涅槃尊像”仏画の御開帳、3 月の春季永代経法要、5 月 5 日には釈尊の降誕を祝して花まつり、8 月の盆法要、縁日の護摩供養法要、10 月の秋季永代経法要を営んでいます。

お近くへお越しの折には参拝して頂きますようお願いします。

ふるさと神前・大日寺パンフレットより

高角山　大日寺

金剛界大日如来座像